

7-8

行列のできるリハビリ

リハビリ参加者は毎回全入所者の5割

リハビリ

ケアスタッフ

特別養護老人ホーム 青梅療育院

発表者：介護副主任 河村 裕矢	共同研究者：介護副主任 宇都宮 盛行
所在地：青梅市今井3-12-6	共同研究者：介護員 年永 和江
TEL：0428-31-8055	E-mail：ryoikuin@jiniku.or.jp
FAX：0428-32-2387	URL：http://www.jiniku.or.jp

今回の発表の施設 またはサービスの 概要	開設28年、住宅街に立地する定員100床の介護老人福祉施設。「利用者の安心と安全を守るゆとりある生活支援」をモットーに職員が一丸となりサービスの質の向上を目指している。長年に渡って、近隣の自治会や学校との交流もある。
----------------------------	--

〈取り組んだ課題〉

- 出来る限り多くの利用者に参加してもらい関わりを持つ
- ケアスタッフが責任者となり実施
- リハビリを生活の一部として実施
- 〈具体的な取り組み〉
- 安全を第一に考え、PT や責任者の指示を必ず守る
- ケアスタッフがリハビリの責任者となり週2回実施
- 他のケアスタッフも当番制でリハビリに関わっていく
- リハビリの前にあらかじめ居室をまわり参加をうながすと共に、日常の介助時においても声かけを行う
- 拒否のある方や認知症のある方も参加してもらえ、日常介助にて接しているなかでアプローチしていく
- 定期的に会議を開催し今後の対応を検討する
- ADL の把握をすると共に、機能を活かせるような介助方法をリハビリを通してスタッフに周知する
- ベッドの配置やシーティング、靴やクッション類の選定、食堂での座席等様々な場面で関わっていく
- 施設の構造上のマイナス面を利用しプラス面として活かす
- OSS の方においては家庭での生活を第一に考え、施設での利用中にADL の維持・向上が図れるよう参加を促していく

〈活動の成果と評価〉

- 日常介助にて接しているスタッフが実施することで利用者方もリラックスすることが出来、気兼ねなく参加することが出来る。結果毎回全入所者の約5割という参加人数となっている
- 根気よく継続的にアプローチすることにより参加してもらえ、ADL の維持・向上に繋がっている
- 認知症の方で大きな効果は期待できなくても、スタッフが声をかけ残存機能を使ってもらい、毎回関わっていくことが大切
- 不穏な利用者も体を温めることで落ち着きがみられる
- 入所時よりADL が向上した利用者も少なくない
- 担当だけでなく他のスタッフも交代でリハビリに関わっていくことで、ADL の把握につながり、残存機能を活かした介助というものを日常的に意識し実施するようになった
- 会議を開催することで今後の方向性がみえスタッフが統一した理解を持つ事が出来る
- 個々の利用者に合った介助の方法を工夫するようになった
- 2F、3F に居住している利用者が毎食1Fにある食堂へ移動することがリハビリとなる

〈今後の課題〉

- 週2回のリハビリ以外の日における対応、訓練をもう少し回数多く実施していければより良い
- 非常勤のPT との連携にて対応しているが、専門性という点では至らない部分も多く、担当のケアスタッフをはじめ各自のさらなるスキルアップが必要
- さらなる職員への周知、徹底が必要

【メモ欄】